

メッセージアウトライン マタイの福音書3：13～17 「バプテスマを受けるイエス」

[13]「そのころ、イエスはガリラヤからヨルダン川のヨハネのもとに来られた。彼からバプテスマを受けるためであった」

ヨハネが真の神を信じ、罪深い生き方を悔い改め、そのことを告白した人々に悔い改めのバプテスマ(洗礼)を授けていた場所は、ヨルダン川が死海に注ぐ、その近くであったと思われる。この時にイエスは住んでおられたイスラエル北部のガリラヤから南に下って、ヨハネのところに来られた。これはイエスもヨハネからバプテスマを受けようとして来られたのである。この時、イエスはおよそ三十歳(ルカ3:23)で時代はAD24年か25年ごろと思われる。

[14]「しかし、ヨハネはそうさせまいとして言った。『私こそ、あなたからバプテスマを受ける必要があるのに、あなたが私のところにおいでになったのですか。』」

ヨハネは神の前に自分の罪を認めて、悔い改めた人々にそのしるしとして悔い改めのバプテスマを授けていたが、イエスに対してはそのバプテスマを受けさせまいとした。それはイエスには何の罪もなかったからである。これはヨハネが初めからイエスが罪のないお方であることを知っていたから、そのように対応したというのではないという解釈である。

ヨハネは自分のもとに来る人を無差別に片っ端からヨルダン川に連れて行ってバプテスマを授けていたのではない。必ず、あらかじめそれを受けるにふさわしい人物かどうか質問し、試してみて、それにふさわしい悔い改めの実を結んでいることがわかったならバプテスマを授けていたのである。それゆえ、そのような実を結んでいないパリサイ人やサドカイ人が来た時にはこれを拒否し、叱責したのであった。
→7~10節 悔い改めの実とはこの場合、自分の罪を告白すること。

イエスに対しても当然そのバプテスマの対象になるべきかヨハネは試したと思われるが、その結果、イエスに質問していくにつれて、自分よりはるかに聖なる人物であることを悟って、「私こそあなたからバプテスマを受ける必要があるのに…」と謙虚に身を引いたのである。

しかし、もう一つの説がある。それはイエスの母マリアとヨハネの母エリサベツは親類であり、高齢で不妊であったエリサベツが主の恵みによりヨハネを身ごもり、そのことを聞いてエリサベツのところへマリアが訪ねて行ったときに、マリアのあい

さつを聞いてエリサベツの胎内にいたヨハネが喜び踊り、エリサベツは聖霊に満たされて主の母であるマリアを祝福したという出来事があった。→ルカ1:5～56
それゆえ、ヨハネは誕生後、母エリサベツより親類のマリアが産んだイエスという子は主の恵みにより聖霊によって生まれた聖なる者、神の子であることを教えられていたことであろう。マリアもエリサベツの家に滞在中、自分の身に起こったこと(ルカ1:26~38)を詳しく伝え、ともに神の御名を讃えたことであろう。そのような中で育ったヨハネはイエスが悔い改めのバプテスマを受ける必要がない聖なる人であることを知っており、そのイエスが自分のところにバプテスマを受けに来たときに、「私こそ…」と身を引いたという説である。ヨハネとイエスは親類として、少年時代、青年時代にも交流があり、ヨハネはイエスを知れば知るほど、罪のない聖なる人物であるとの更なる思いを持ったのかもしれない。

しかし、ヨハネ1:29~34でヨハネは、御霊が鳩のように天から降って、ある人の上にとどまるのを見たら、その人こそ、聖霊によってバプテスマを授ける者であると教えられまでは、「私自身もこの方のことを知りませんでした」と言っている。知らなかったと言っているヨハネがどうしてイエスに罪を認めず、悔い改めのバプテスマを受ける必要がないと言ったのであろうか。やはり、イエスがヨハネのバプテスマを受けに来たときにイエスが罪の告白と悔い改めの必要がない人であることが分かったからではないだろうか。しかし、その時点ではイエスが世の罪を取り除く神の子羊(救い主)とまでは理解していなかったのかもしれない。

[15]「しかし、イエスは答えられた。『今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです。』そこでヨハネは言われたとおりにした」

確かに神の御子であるイエスは罪のないお方であるので、罪の悔い改めのバプテスマを受ける必要がなかった。しかし、この世に人となって来られたイエスは、すべての点で人と同じようにならなければならなかった。→ピリピ2:6~8、ヘブル2:17~18 それゆえ、イエスには罪がないが、すべての点で正しいことを行うのがふさわしいと答えられたのである。神の求められる正しいことを行うのはイエスだけではなくヨハネも他の人々も同様に当然のことなのである。

「今はそうさせてほしい」とはまもなく悔い改めのバプテスマではなく、メシアによる「聖霊と火」(マタイ3:11)のバプテスマの時代が来ることを示している。

[16-17]「イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると見よ、天が

開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来られるのをご覧になった。そして、見よ、天から声があり、こう告げた。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』

イエスのバプテスマには超自然的現象がともなった。「天が開け、神の御霊が鳩のようにご自分の上に降って来る」のをご覧になった。ヨハネもそれを見て、イエスが神の子であることを知ったと言う。→ヨハネ1:32-34 さらに火のバプテスマ(3:11)

を授ける方の上に神の御霊が柔和の象徴である鳩のように降ったのは神のいつくしみと厳しさが同居していることを思わされる。→ローマ11:22

「天からの」声は神の声と同じことであり、「これはわたしの愛する子」とは父なる神との特別な関係を示し→ヨハネ1:18、エペソ1:6 「わたしはこれを喜ぶ」とは私の喜びがこの者にあるという意味。これは神への全き服従をもって仕える神のしもべの姿であり、イザヤ書42:1-4のメシア預言の一部である。→マタイ12:17-21

この箇所において、父なる神、子なる神イエス・キリスト、聖霊なる神の三位一体が描写されていることに注意。このときから人間イエスが神の子となったというのは間違った解釈である。

イエスはこの預言を成就するために立てられた「神の愛する子」であり、その犠牲、苦難のしもべとしての働きは、神にとって「喜び」なのである。

ここで起こっていることは、父なる神との関係において神の子が、なすべき働きに任じられたことを意味している。すなわち、このときからイエスの世の救い主としての公生涯が始まったのである。

見よ。わたしが支えるわたしのしもべ、
わたしの心が喜ぶ、わたしの選んだ者。
わたしは彼の上にわたしの霊を授け、
彼は国々にさばきを行う。
彼は叫ばず、言い争わず、
通りでその声を聞かせない。
痛んだ葦を折ることもなく、
くすぶる灯心を消すこともなく、
真実をもってさばきを執り行う。
衰えず、くじけることなく、

ついには地にさばきを確立する。

島々もその教えを待ち望む。

イザヤ書42:1～4

このお方こそ私たちの救い主イエス・キリストなのである。